

# 國學院大學學術情報リポジトリ

古典文を文法的に読むということ：

『源氏物語』夕顔巻「おのがいとめでたしと」の解釈について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小田, 勝, Oda, Masaru メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000712">https://doi.org/10.57529/00000712</a>

# 古典文を文法的に読むということ

— 『源氏物語』夕顔卷「おのがいとめでたしと」の解釈について —

小田 勝

## ○ はじめに

古典文を文法的に読む、すなわち古典文を日本語学的知見を利用して読むという場合、次の二つの手法がある。一つは、ある句型がどのように解釈されるかを明らかにした論考の成果を、同じ句型の解釈にそのまま適用するもの、もう一つは解釈文法とは無関係に説明された語学的な法則的事実を古典文の解釈に用いるものである。前者には、例えば、

・「…て…禁止」という句型は命令の意だけが「て」節に及び「…しろ、…するな」の意を表すという青島徹（一九六〇）の指摘

・「遅く…」という句型は「その時間になっても…しない」の意を表すという岡崎正継（一九七三）の指摘

・「…ばや…連体形」という句型は「…から…のか」の形で解釈されるという小田勝（二〇一七）の指摘

を、それぞれ該当する古典文の句型の解釈にそのまま用いるなど、後者には、例えば、

・小松登美(一九五七)、岡崎正継(一九八六)などが指摘する「中古の助動詞「き」は発話当日中の過去を表さない」という法則的事実を『源氏物語』夕顔卷の「君は御直衣姿みぢいじんにて、御隨身みずいじんどもも、ありしなにかし、くれがし。」(①一五〇)、読点の位置を変更)の句読に用いる(小田勝(二〇一八)六四頁で述べた)

・岡崎友子(二〇〇二)が指摘する「中古のサ系の指示副詞は直示(現場指示)に用いられない」という法則的事実を百人一首歌「我が庵は都の辰巳しかぞすむ」の解釈に用いる(小田勝(二〇二二)で述べた)

などの事例があげられる。特に後者は、本来解釈を目的としたものではない日本語学的な知見を、古典文解釈という別の目的に流用しようというものだから、その適用には一種の勘のようなものが必要であり、難易度が高い。そこで、本稿は、この後者の手法の重要性を示すため、その一事例として、『源氏物語』夕顔卷の次の妖怪の詞の傍線部の解釈を考えようとするものである。

1 宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御枕まくら上かみにい

とをかしげなる女ゐて、「おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率あておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつられ」とて、この御かたはらの人をかき起こさむとすと見たまふ。(①一六四)

実は、古典語学の専門的な知識のある者ならば、右の傍線部の解釈は直ちに一意に決まって解釈に揺れは起きないのだが、その知見が文学の研究者に届かず、この文の解釈に関する諸氏の所論は、さうとう無用に混乱していると評されるのである。「語学的な法則的事実の古典文解釈への適用」の一事例とするゆえんである。

### 一 諸注の解釈

まずはじめに、戦後の主要注釈書の解釈を確認しておく。大きく、次の三種のものに分けられる。

I 「見たてまつる「人」「人」は「おの(＝私)」以外の人」の意の準体言に取るもの

- ・わたくしが君をいとめでたしと見申しあげているのに、そのわたくしを、見むきもしてくださらないで……: というように見るのが普通であるが、これは「いとをかしげなる女」を六条御息所にあてて考えるのによるものであろう。それを離れて文章を白紙の心で考えるなら、わたくしがほんとうにお立派だと見申しあげているお方をば見むきもなさらないで……: というようになるであろう。またその方が次の「かくことなることなき人を」に対しても自然なように思われる。しかしそれでは、この「をかしげなる女」はだれかの肩をもっているだけで、自分の直接のうらみでない点に、割りきれないところが出る。(佐伯梅友『校注源氏物語新抄』武蔵野書院、昭和52年)
- ・われがいかにめでたしと見申すお方をば心してお求めにすることなく、かかる格別のことなき女を率いてここにわざわざご寵愛になるとはまことに心外で恨めしいよ。「をば」の下に「人」が略されていると見ておく。(柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎、新日本古典文学大系『源氏物語一』岩波書店、平成5年)
- ・われがいかにもすばらしいと拝見するお方をば心して訪れなさることなく、こんな格別のこともない人(夕顔の女)

を連れてここにいらしてご寵愛になるとはまことに心外で恨めしいことよ。「をば」の上に「人」(六条の女)が略されているとする説に従う。(柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎、岩波文庫『源氏物語一』岩波書店、平成29年)

## II 「見たてまつる」「おの(=私)」の意の準体言に取るもの

・ほんとうにご立派とお見あげ申しておりますわたくしを尋ねようともなさらないで、こんな取柄とらえもない女をつれておいでになってちやほやなさるなんて、ほんとに呆あまれます、たまりません(玉上琢彌『源氏物語評釈一』角川書店、昭和39年)

## III 「をば」を接続助詞風に取るもの

- i 逆接の意として解釈するもの(ただし、※を付したものは、意味的にはIII iiの解に、したがってIIの解に帰着する)
- ・私が大層お立派だとお慕ひしてゐるのに、お訪ね下さらないで、こんな取柄もない女を連れていらつしやつて御寵愛になるとは、ひどく心外に恨めしい。(池田亀鑑、日本古典全書『源氏物語一』朝日新聞社、昭和21年) ※わが身が、まことにめでたき夫つまとお慕い見しているのに、お訪ねくださらず、かように別段のこともない女をお連

れなされて、ご寵愛ちゆうあいになるとは、ほんとに心外で、つらいことだと思います。(阿部秋生・秋山虔・今井源衛、日本古典文学全集『源氏物語一』小学館、昭和45年)※  
 (頭注「私がごりつぱだと存じあげているお方(御息所)を」と解する説もある。)

・私があなを大層美しいと思つてゐるのに(傍注)私を愛して尋ねても下さらないで(傍注)(吉澤義則『対校源氏物語新釈一』平凡社、昭和27年)※

・私が大層ご立派なお方とお慕い申していますのに(傍注)(石田穰二・清水好子、新潮日本古典集成『源氏物語一』新潮社、昭和51年)

・この私が、まことにご立派なお方とお慕い見しているのに、訪ねようともお思いにならず、かように別段のこともない女をお連れなされて、ひどくかわいがつていらつしゃるとは、ほんとに心外で恨めしく存じます。(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男、新編日本古典文学全集『源氏物語一』小学館、平成6年)※  
 ・この自分が、まことにすばらしい、とあなたのことをお慕い申しあげているのに、あなたは訪ねようともお思いにならないで、こんなふうに大したこともない女を連れ

ておいでになり、ご寵愛ちゆうあいになつていらつしゃるのが、本当に不愉快で恨めしい(中野幸一編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識⑧夕顔』至文堂、平成12年)※

・この私わたくしがまことにご立派なお方とお慕い申しておりますのに、尋ねてやろうともお思いにならず、このような何の取り柄もない女を連れておいでになり、ご寵愛ちゆうあいなさるとは、まことに心外で恨めしく存じます。(中野幸一『正訳源氏物語本文対照第一冊』勉誠出版、平成27年)※

ii 「:」のに、その私を」のような意で解釈していると思われるもの(意味的にはIIの型と言える)

・私が、御身(源氏)を大層お美しいと見申すのに、それをば源氏は訪ねることもお考えなさらずして、こんな、格別取柄も無い女を連れておいでなされ、御寵愛ちゆうあいなさるのは、どうも私はひどく心外でつらい。(山岸徳平、日本古典文学大系『源氏物語一』岩波書店、昭和33年)

・私はあなたさまをほんとうにお立派なお方だとお慕ひ申しあげてをりますのに、その私を、尋ねてやらうともお思ひにならないどころか、こんな吹けば飛ぶやうなつまらない女を連れていらして、おかはいがりになるなんて、いかにも見るも嫌な、くやしいお仕打ちですこと(今泉

忠義訳『源氏物語現代語訳一』桜楓社、昭和49年)

私が(あなた様を) 誠にすばらしいとお見あげ申して  
いますの(に、その私)を、尋ねようともお思いになら  
ないで、このように格別なこともない女性をお連れなさ  
つて、御寵愛あそばすなんて、全く心外で薄情なことす。

(佐藤定義訳『源氏物語一』明治書院、平成7年)

iii 「…のに、そのことを」のような意で解釈していると思わ  
れるもの

・私が、本当にすばらしいお方だと見申し上げているのに、  
それに対しては尋ねても下さらないで(人もあろうに)  
こんな何の取り柄もない人を連れていらつしやつて、ご  
寵愛なさるとは、まことに心外で薄情なこと(ございま  
す(山崎良幸・和田明美『源氏物語注釈二』風間書房、  
平成12年)

## 二 解釈の候補と先行研究

さて、1の句の解釈として、あり得る候補を列举すれば、次  
のもので尽きるであろう。<sup>(3)</sup>

A 「見たてまつるをば」の「たてまつる」を準体言、「を」を  
格助詞とみる。

① 「おのがいとめでたしと見たてまつる△をば」の△に「人」  
「おのが」の「おの」以外の人) が補われる。(前節の

I)

② 「おのがいとめでたしと見たてまつる△をば」の△に「人」  
「おのが」の「おの(≡私)」が補われる。(前節のII

とIII ii)

③ 「おのがいとめでたしと見たてまつる△をば」の△に「コ  
ト」が補われる。(前接のIII iii)

B 「見たてまつるをば」の「を」を接続助詞とみる。(前節の

III i)

C 「見たてまつるをば」で終止する、「をば」を終助詞とみる。

右のうち、Bは無さそうに思われる。実際、『源氏物語』に「を  
ば」は、1を除いて三二五例存するが(CD-ROM角川古典大  
観源氏物語」の検索結果による)、その内訳は、「体言に付くも  
の」二八三例、「連体形+をば+他動詞」一五例、「連体形+を  
ば+…(に)／と／連用形)+思ふ(見る・恨む・嘆く・す)」の  
句型一三例、「連体形+をば+さるものにて」二例、「連体形+

をば」が「…に對して」の意のもの一例であつて、強いて接続助詞風に解釈できそうな例は、次の一例くらいである。

2 父親王おはしけるをりにだに、古りにたるあたりとてお

となひきこゆる人もなかりけるを、まして今は、浅茅分  
くる人も跡絶えたるに、かく世にめづらしき御けはひの  
漏りにほひくるをば、生女ばらなども笑みまけて、「な  
ほ聞こえたまへ」とそそのかしたてまつれど、あさまし  
うものづつみしたまふ心にて、ひたぶるに見も入れたま  
はぬなりけり。(末摘花①二七九)

しかし2の「をば」の「を」も、「をば」の全用例からみて、「…に對して」の意で「そそのかしたてまつれど」に係る格助詞と考えるのが適當だと考えられる。Cは、「事の語り言も此をば」(古事記・歌謡二)のような終助詞(用法)を考えてみるものだが、『源氏物語』に終助詞(用法)の「をば」はほかに存せず、形としても不自然な上、「をば」で文が切れるならその下の「尋ね思ほさで」の目的語が欠けることになるが、その欠けた目的語は内容的にも——さらに言えば形態的にも——「…をば」の部分であるから、これを補つて解釈するなら、「…をば尋ね思

ほさで…」の形で解釈することに変わりはなくなる。問題は、その「…をば尋ね思ほさで…」が中古和文としてどのような意味を構成するか(どのような意味しか構成されないか、とも言つてもよい)ということである。

さて、この句型について一連の論考を提出したのは門前真一氏であるが、当初、門前真一(一九五八)では右のA①の解とA③の解で揺れていた(ようにみえる)ものの、同(一九六五)で「疑問の余地のない単純な連体節(引用者注、本稿のA①の解をいう)である。」(一七九頁)と断定し、続く同(一九六七・一九六八a・一九六八b)でA②のような文構成は成立し得ないことを強く主張した。A②の文構成については、これをあり得る句型だとする此島正年(一九六七)の反論があるのだが、これについては両氏とも視点がずれている。A②が成立しないのは「おのがいとめでたしと見たてまつる」「おの」をば」という同一名詞の想定が不可なのではなく、原因は「たてまつる」の動詞としての性質にあつて、もしこれが、

3 おのがいとめでたしと見たてまつれる、「おの」をば

のように、存続の助動詞「り」が付いた形ならば成立し得る句

型となる（なぜかは後述）。ただし、3のような句型を門前氏は再三「同格」と言われるが、これは同格構文ではない。これは、

- 4 五条にぞ少将の家ある△にいきつきて見れば（大和物語・三二三）△||少将の家

と同じもので、準体言の下に補われる主名詞が準体節内に残存しているもの、近藤泰弘（一九八一）のいわゆる「残存型」、黒田成幸（二〇〇五）のいわゆる「主辞内在関係節」といわれるもので、ちょうど現代語の

- 5 机の上にみかんがあるのを取って。（「の」||みかん）

などと同じ句型である。古典語では6〜8のような例があり、これに3を並べてみれば、同じ句型であることがわかるだろう。

- 6 姫宮思しわづらひて、弁が参れる△にのたまふ。（総角・⑤二四七）△||弁
- 7 盗跖が諫（||勇）メリシ△（||勇敢ダッタ）モ死ニキ。

（今昔物語集・②三五二）△||盗跖

- 8 水ノ上ニ木ノ葉ノ有リシ△ヲ取テ見シカバ（今昔物語集・②三一〇）△||木ノ葉

- 9 おのがいとめでたしと見たてまつれる△をば（||3）△||おの

つまり、3（||9）の句型は成立するのだが、同一名詞を想定することとは異なる理由で、A②の解は成立しないということなのである。

### 三 作用性用言が構成する準体句

さて、準体句には、次例10aのように、顕在していない主名詞（4、6〜9で△で示してきた部分）にヒトやモノが想定される準体句と、10bのように、顕在していない主名詞にコトやノ（トキ・サマ・トコロを含む）が想定される準体句とがある。

- 10a 仕うまつる人の中に心確かなる「人」を選びて（竹取物語・三七）
- b むかし、月日のゆく「コト」をさへ嘆く男（伊勢物語・

一九四)

10 aを「モノ準体」、10 bを「コト準体」と呼ぼう。さて、石垣謙二(一九四二)によれば、日本語の活用語は、次の二つに分けられる。

- 11 a 形状性用言：終止形がイ段音の語(形容詞・形容動詞・ラ変動詞、および「べし・たり・けり・き」などの助動詞)、動詞「見ゆ・聞こゆ・思ほゆ・候ふ・おはす」といふ・になる」、助動詞「ず・む・らむ・けむ」。
- b 作用性用言：右以外の活用語

そして、石垣謙二(一九四二)によれば、形状性用言・作用性用言のどちらもコト準体を作ることができるが、モノ準体は形状性用言しか形成できないのである。

- 12 形状性用言   コト準体   モノ準体  
作用性用言   コト準体

例外は13のような場合で、準体句が主語に立ち、かつ述語が形

状性用言である場合には、作用性用言でモノ準体を形成することができるとができる。

- 13 猛たけき武士ものぶの心こころをも慰なぐさむる△は歌なり。(古今集・仮名序・一七)

有名な『源氏物語』の冒頭もこの句型である。

- 14 いづれの御時おほむときにか、女御にようご、更衣かういあまたさぶらひたまひける中に、いとやむなごとなき際きまにはあらぬが、すぐれて時ときめきたまふ△ありけり。

したがって、1の準体言は「見たてまつる」という作用性用言であり、「見たてまつるをば」という「を」格に立つのだから、これはコト準体としての読みしかあり得ないのである。夙むかしく島津久基(一九三七)は、1を次のように訳出している。

- 15 私がこれ程御慕おぼひ申してゐるのをば、見向きもなさらんとはせずに、かういふ所へこんな何の見だてもない人なんぞ連れ込んで御可愛おぼがりになるなんて、あんまりでこ

ざいます。(一七七頁)

渡辺泰宏(一九九〇)は、この「正解」について、「島津博士に代表されるハ(引用者注、諸説をイロハと分けたハで、本稿にいうA③説に当たる)のような解釈も成り立つと考えられるのであり」と遠慮がちに述べているのだが、この準体言にあっては15の解が排他的に一意に決定せられるのである。すなわち、1の傍線部の「おのが」の「が」は主格を表す格助詞、「見奉る」は「見奉る」「こと」の意のコト準体(作用性名詞句)、「見奉るを」の「を」は目的格を表す格助詞である、ということになる。

#### 四 「尋ね思ほさで」の解

「おのがいとめでたしと見たてまつるをば」の句構造を前節で確定したので、ここではそれを受ける「尋ね思ほさで」の解釈を考えたい。「尋ぬ」の目的語は「…コト」という作用性名詞句だから、「尋ぬ」は北山谿太『源氏物語辞典』(平凡社・昭和32年)のいう、「①心をとむ」の意であろう。同書には、

16 人の誇りねむごろに尋ねじと思しける。(蜻蛉・⑥  
二四三)

などの例があげられている。

「連用形+思ふ」は、次のような例に照らせば、「…むと思ふ」の意を表すと思われる。

17 はかばかしう後見思ふ(後見ムト思フ)人もなきま  
じらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら(桐

壺・①三〇)

18 「夕霧ヲ」かく幼きほどより見馴らして、後見思せ(後見ムト思セ)と「源氏ガ花散里ニ」聞こえたまへば(少女・③六七)

19 「玉鬘ノ乳母ハ」心の中にこそ急ぎ思へど(急ガムト思ヘド)、京のことはいや遠ざかるやうに隔たり行く。(玉鬘・③九三)

20 「昔、「アナタガ」世づかぬほどをあつかひ思ひし(ハムト思ヒシ)さま、…」など「源氏ガ紫上ニ」聞こえたまふ。(若菜下・④二〇四)

20 「昔、「アナタガ」世づかぬほどをあつかひ思ひし(ハムト思ヒシ)さま、…」など「源氏ガ紫上ニ」聞こえたまふ。(若菜下・④二〇四)

したがって、「尋ね思ほさで」は、「気にとめようと、もお思いにならないで」のような意になるであろう。

## 五 おわりに

以上を要するに、1は、私見では、次のように解釈される。

宵を過ぎるころ、少し寝入っていらつしやると、御枕許にとても美しい感じの女が座って、「ワシが（あなたを）とても素晴らしとお見申し上げて、気にとめようともお思いにならないで、このような格別なこともない女を連れていらつしやってご寵愛なさるの、まったく癪にさわり辛い」と言つて、このお側の人を掻き起こそうとすると御覧になる。

自称の代名詞「おの」については、若い女性が用いるものではないこと、今井源衛（一九八九）に考証がある。

この妖怪の正体について議論があるが、右の訳文にみるように、「この妖怪（女）は、誰かは分からないように書かれている」というのが原文に即した見方であろう。<sup>(1)</sup> 源氏に魅入った霊かも

知れないし、妖怪はただ誰彼構わず同じ科白を繰り返しているだけなのかも知れない。分からないのである。<sup>(2)</sup>

最後に一言する。本稿に述べたような事例は、日本語学の知見が文学の研究者に届いていない、ということが原因なのであつて、これは一に日本語学研究者の発信に問題があるといふべきことなのである。<sup>(3)</sup>

## 注

(1) 古典文の引用は、『今昔物語集』が新日本古典文学大系を用いたほか、すべて新編日本古典文学全集による。数字は頁数を示す。

(2) 「をば」の上に」の誤記。改編版である岩波文庫では「上に」と直されている。

(3) 1の文は、『源氏物語大成校異篇』（二二三頁）によれば、特に考慮すべき異文はみられない。

(4) 主格の「が」も格助詞である。

(5) 「句官ハ」心の深うしみたまふべかめる御心ざまにかなひ、ことに背くこと多くなどものしたまはざらむをば。『ユウナ女二対シテハ』、さらに、軽々しく、始め終はり違ふやうなることなど、見せたまふまじき気色になむ。（権本⑤二〇八）

(6) したがって、この古典文に対する新編日本古典文学全集の訳「こうして世にも珍しいお方からのお便りが時にもたらされるようになっていくのだから、つまらぬ女房までも、相好をくすして」（傍線引用者）は、不適切な訳であろうと思う。旧版（日本古典文学全集）は「お手紙が

時に届くようになったのを、「新潮日本古典集成は「すばらしいお手紙が時々来るのを」、新日本古典文学大系は「すばらしいお便りが時々もたらされるのを」。

- (7) 妖怪の詞であるから、不自然な言葉でも良いではないかという考えかたはあり得るところである。例えば柏木巻で登場する物の怪の言葉「かうぞあるよ」は、係り結び文の結びの末尾に終助詞「よ」が現れるのは中古では孤例で（中古ではかかる句型はほとんど「ぞーや」「ぞーかし」「こそな」の三型に限られる）、さうとう異様に響いたのではないかと思われる（小田勝（二〇〇六））。本稿で問題にしているのは、「……をば尋ね思はさて……」という完全な形の中古和文が与えられたとき、それがどのように解釈されるものであるかということである。
- (8) 準体言の下に主名詞を補うという扱いの正当性については、小田勝（二〇一五）三三七頁を参照。
- (9) 「見る」を「……と判断している」のような状態性の意味であるとして、作用性用言でも例外として扱おうとする考えもあろうが、謙讓語に「奉る」が選択されている点からも、やはり無理であろう。和田利政（一九五二）によれば、「奉る」は動作動詞に付くことが多く、「聞くゆ」は心理動詞に付くことが多い。

- (10) もちろん石垣謙二の11の動詞分類、12の法則が不動の完璧な法則であるというつもりはない。例えば、岡崎正継（一九六二）は、11の形状性用言に「イ」なふ・なんだ、（ロ）おはします・ものす（二語共ニ「アリ」ノ意味ヲ表ハスモノ）、（ハ）体言―す・体言―仕る（賓語トシテノ体言ハ存在ノ意味ヲ表ハスモノ）、（ニ）形容詞―す・情態副詞―す（形容詞・情態副詞ハ「ス」ノ賓語ニナツテキルモノ）、（ホ）てゐる（継続状態ヲ表ハスモノ）」を追加することを提案している（なお、この追加提案は本稿の論旨に影響するものではない）。このように、11、12は不断に見直されるべきであるが、本稿は、現在の日本語学の

知見を古典文の解釈に適用したらどうなるか、ということの問題にしているのである。

- (11) 節介で「物好きに」一役買つて出たえらく御息所虫貞の妖怪」（鳥津久基（一九三七）二〇六頁）ということになってしまふ。

- (12) 想像を逞しくすれば、例えば、本妻からの圧迫に堪えかねて道ならぬ恋に死んだ女の霊とでも考えれば、夕顔の女と相似形を成すが、そんな想像をしてみても無意味であろう。

- (13) 日本文学の研究者に、石垣謙二の「作用性用言反撥の法則」をあらかじめ読んでおいて、これを夕顔巻の文の解釈に応用しろというのは、無理な要求とすべきである。逆のことも言えるので、文学の研究者の常識が必ずしも語学研究者の常識ではない所も多々あるだろうと思う（特に和歌文学の領域にそれが多く感じられる。恥ずかしながら、本稿の筆者は、古典和歌を読み始めたころ、歌合に妙に存在感のある「女房」が出詠していて、どういふことだろうと思つたことがある。このことを和歌文学を専攻する方に話すと、皆さんお笑いになるが、語学研究者に話しても笑いの意味が分からない人が多い）。本稿の筆者は、古典文の解釈は語学的な知見に基づいてなされるべきだと思つているし、古典語学の研究者も、もっと古典文学作品の注釈をするべきだと思つている。文学、語学双方が互いに情報発信し合うことが密になるよう願っている。

#### 引用文献

青島徹（一九六〇）「桐壺」限りなき御思ひどちにて―連用形と禁止表現との関係について―『言語と文藝』二一―四

- 石垣謙二 (一九四二) 「作用性用言反撥の法則」『国語と国文学』一九一—二〇一
- 今井源衛 (一九八九) 「おのがいとめでたしと」考『源氏物語とその周縁』和泉書院
- 岡崎友子 (二〇〇二) 「指示副詞の歴史的变化について」『国語学』五三—三三
- 岡崎正継 (一九六二) 「副詞「いまだ」「まだ」について」『文学・語学』二二五
- (一九七三) 「御導師遅く参りければ」の解釈をめぐって『今泉博士古稀記念国語学論叢』
- (一九八六) 「今昔物語集の「今夜」と「夜前」と」『國學院雜誌』八七—九
- 小田勝 (二〇〇六) 「文末に終助詞を伴う係結をめぐって—源氏物語を資料として—」『岐阜聖徳学園大学紀要』四五
- (二〇一五) 『実例詳解古典文法総覧』和泉書院
- (二〇一七) 「和歌における「ばや」連体形」の解釈について『國學院雜誌』一一八—三
- (二〇一八) 『読解のための古典文法教室』和泉書院
- (二〇二二) 『百人一首で文法談義』和泉書院
- 門前真一 (一九五八) 「夕顔の巻の「おのがいとめでたしと見奉るをば……」の「をば」についての補説」『天理大学学报』二七
- (一九六五) 『源氏物語新見』門前真一教授還暦記念会 (非売品)
- (一九六七) 「おのがいとめでたしと見奉るをば」の「をば」についての追考—岩瀬法雲さんへの反論—『季刊文学・語学』四三
- (一九八八) 「おのがいとめでたしと見奉る」に主述関係はあるか—同格句説の検討—『国語と国文学』四五—二二
- (一九八八) 「おのがいとめでたしと見奉るおのれ」といふ文

- 構造を作り出せるか—同格句説批判—『山辺道』一—四
- 黒田成幸 (二〇〇五) 『日本語からみた生成文法』岩波書店
- 此島正年 (一九六七) 「おのがいとめでたしと見奉るをば」の論統貂『季刊文学・語学』四五
- 小松登美 (一九五七) 「つ・ぬ」『国文学解釈と鑑賞』二二—二一
- 島津久基 (一九三七) 『対訳源氏物語講話卷三夕顔』中興館 (名著普及会復刊、一九八三年)
- 和田利政 (一九五二) 「源氏物語の謙遜語」『日本文学論究』一〇
- 渡辺泰宏 (一九九〇) 「おのがいとめでたしと見奉るをば」つね思ほさで—その解釈とものけのけの正体—『中古文学』四六